

巻頭言

連帯して働く人の 自由と貧困についての学びなおし

上平 泰博（協同総合研究所 理事）

「近代教育の父」と謳われたペスタロッチ(1746-1827)は、スイスのシュタントツ地方で孤児院、貧民学校をつくったことで知られる。18世紀半ばに始まった産業革命によって、人々は中世にすらなかった未曾有の貧困と飢餓に喘いでいた。

フランスでは市民革命(1789)が勃発し、飢饉も重なって社会的混乱期を向かえている。ペスタロッチの暮らしたスイスも、フランス革命に呼応して共和国となった。フランス植民地のカリブ海ハイチでも、世界初の黒人国家が成立するといったように、二つの革命の余波は世界中を席捲していく。

ペスタロッチは、人間は生まれながら同等平等(『隠者の夕暮れ』)であるとし、貧民、孤児たちを引き取り、主に農業を基盤に彼らの生活救済へと奔走した(『リーンハルトとゲルトルート』)。また『シュタントツ便り』には、自然のうちにある動植物の子どもたちに与える教育の効果は、最も良き生活者の教育＝陶冶であると語っている。

ペスタロッチはルソーからの思想的影響を濃厚に受けたが、理論と実践の乖離が過ぎたルソーとは違い、その真

骨頂は実践者であることだった。「協同組合の父」ロバート・オーエンも、ペスタロッチの名声を知るに及んで、この貧民学校を見聞している。

詰め込み教育とスパルタ教育が一般的だったこの当時、ペスタロッチ思想と実践はヘルバルト、フレーベルなどの教育者、保育者らに継承されていく。日本でも沢柳、小西、小原らによって大正自由主義教育の旗頭として普及し、設立された私立学校の多くはペスタロッチ主義思想の流れを汲み、自発性を重視した「直観(社会関係を通じて知の本質をとらえる)教育」と「労作教育」という鍵となる概念を抜きには考えられなかった。

ドイツ語のArbeitを労働ではなく「労作」と訳したのは、「一日不作、一日不食」という禅宗法話に基づき翻案されたとされる。「労作教育」には、労苦なるがゆえに創造・創作の情動労働という想いが込められ、労働と教育、生活と教育の結合が問われた。

福沢諭吉の『西洋事情』(1865)と『学問のすゝめ』(1872)には、前著では「労する」、後著は「働く、働き」と表現されるのみで、労働と直截使用したの

は、『品行論』『尊王論』以後からでしかない。福沢の著と同じく大ベストセラーとなったスマイルズの『自助論』を翻訳した中村正直『西国立志編』(1871年)の中には、労「動」という用語が充てられている。

ところで、働く人たちによって結ばれた社会「連帯」(Solidarity)運動とは、他者と共にいる、他者と共に生きる「共存存在」という生存権を帯びた人類史のレガシーだったのではないか。欧米、中南米の協同組合において顕著に見られる「連帯」とは、歴史社会的概念である。

Solidarity(連帯)と重なるSorority(女子の社交友愛組織、ラテン語だと「soror」姉妹)は、「友愛」(Fraternity、ラテン語の「frater」兄弟)にも由来する対語なのだ。つまり「連帯」(姉妹)と「友愛」(兄弟)は、密接不離の語源なのである。

とはいえフランス革命の「自由」「平等」「友愛」の標語は同時同軸には展開されず、「自由」の後に「平等」「友愛」が、長い時間を経て順次に定着していく。

フランスは共和政と帝政を交互に繰り返しながら、そのつどクローズアップされる「平等」希求と、更に出遅れて「友愛」「連帯」が19世紀末に確立されていく。西欧近代化の過程において、社会と個人の進化の矛盾を止揚させようとコントやデュルケムの理論が

登場したように、その内実は紆余曲折を経ている。

15世紀から始まった「大航海時代」幕開けからの500年間は、欧米列強の植民地の獲得支配による所有と搾取が世界中で繰り広げられた。産業資本主義も、また詩人にして革命家ホセ・マルティの「人間は自由な存在である」といった諺も、「自由」渴望の名において目的を実現せんとするとき、かならずや多大な犠牲を他者に強いた。とりわけ権力者による「自由」の代償はあまりに大きい。

「自由」の権利拡張は、人間解放の合言葉でもあったが、フランス革命が教育の自由と平等をめぐる闘いでもあったように、コンドルセ(自由派)とルペルチェ(平等派)との間には烈しい対立と抗争が浮上している。「平等」「友愛」「連帯」は互酬といった相互扶助の精神のみならず、「自由」に対するストッパーにもなっていた。

しかし人類史から見たとき、「自由」は第一の欲求ではなかったと思われる。人類30万年の持続可能性は、そもそもが「連帯」と「友愛」と「平等」を基層にしていたのではないか。

そうでなければ、人類は生き残れなかったろう。皆で食べて生きて暮らすには分ちあい、支えあい、学びあいが最優先され、共に生きて働く喜びも、「ここに自分が居る」という共存存在の承認あつてのことだろう。皆で食べる

ことが生きる喜びだったころ、食を得るためだけに働くという手段として終始しない。働くことは労苦の快感であって、自らを支えてくれているという他者存在に対する感謝の意識も、表現する場の喜びもあったろう。

ところが「高度」に発達した今日の方が、共に食することすら困難(貧困)になっている。生存すら許されず、貧乏より更に低質な貧困連鎖が、どの地域の誰に対しても脅かすように押し寄せている。ヒト・人らしくが育ちににくい現況は末期社会かもしれない。

SDGsの17目標を鳥瞰すると「平等」は随所にみえる。そして第1番目の「貧困」は、第2番目の「飢餓」と分けて説明されている。かつての「貧困」は、近代化にとり憑いて離れない物的格差による「飢餓」だったのに、今は人々との心の連結が遮断させられるばかりか、排除もされ、「平等」「友愛」「連帯」という「共に」が喪失されてしまう、致命的ともいうべく「先進国」特有の「貧困」が大問題なのである。

人の誕生も死も生存もフーコーにかかると、近代的権力に巧妙に支配された「生政治」であって、同質的で無機質と化した孤独な人間としてのみ、社会システムの中に存命できるに過ぎない。あのイタリア労働者たちをイメージしたネグリのAutonomia(自治自律)を模倣するなら、強いられ忌避したくなる労働などお断りだと、その苦悩を意識化しているうちにこそ問われるべきだろう。

貧困と労働と学びは、いつも三面表裏の関係にある、そのことに自覚的でありつづけたい。

大田堯先生を偲んで 合掌